『軍国主義という病がひそむ国　1』　　2025 年 10 月 27 日

ノンフィクション作家の保阪正康氏は半藤一利氏と共に、近現代史の第一人者であるが、「東京新聞」が 2021 年～24 年の毎月 8 月に主催した「ニュース深堀り講座」で語った 4 講演を『軍国主義という病がひそむ国』に再構成し、今年の 6 月に出版している。ベストセラーになっているらしく、私も遅まきながら、興味深く読んだ。保阪氏は戦争を指導した将官から戦場の一兵士まで、延べ 4 千人から取材しているから、裏付けは確かで、言葉が重い。しかし、大変分かり易い講演で、日本は再び誤った道に進んではならないという熱意が伝わってくる。本書は、最終回の 24 年 8 月に語った「新しい戦前にしないために戦後 80 年を前に学ぶべき教訓は」の講演から始め、順次、年を遡っている。

タレントのタモリさんが言った言葉「新しい戦前」が、今の時代を捉えているのか、多く引用されている。保阪氏は、「新しい戦前」を言い当てている二つの社会事象をあげている。一つは、都知事選で二位につけた石丸伸二さんが市議会で「恥を知れ、恥を」と怒鳴っている映像である。帝国議会の軍人の答弁じゃないか。古いファシズムや軍国主義の名残は消えたようだけれども、こういう形で復元してくるのだと分かったと言う。もう一つは、海上自衛隊出身者が靖国神社の宮司になったことである。昭和天皇は、A 級戦犯が合祀されてからは、靖国神社に行かなくなった。サンフランシスコ条約で東京裁判を是認することが日本の国際社会へ復帰する条件であったからである。その後の天皇も、昭和天皇の遺言を守った。令和になって、自衛隊が平然と靖国神社と一体になっていくことを宣言した。こういう形が「新しい戦前」なのだと理解していると言う。戦争には、理由もあっただろうが、戦争に潜んでいる本質的な問題は、人間を会社の営業品目のように扱い、国民の命など知ったことかと戦場を拡大し、自己崩壊していったことである。軍事指導者たちは傷つくことなく、戦後の社会で責任をあいまいにしている。このあいまいさが日本の特徴である。東條英機首相は、遺書に、天皇と一体で、天皇の言った通り、考えた通りをしたと書いているが、実際は、天皇に嘘の報告をし、天皇を利用していた。最も大きな過ちは、軍部が政府よりはるかに上回るシステムを作り、軍部が政府を統制し、振り回したことである。鉄砲を持っている人に政治的な発言をさせてはならないと強調している。そして、戦後に、戦争を無謀に拡大させた状況を、正しく把握し、認識する努力が決定的に欠けていた。昭和の歴史をきちんと整理、清算することをしなかった。だから、戦争中のシステムがそのまま温存されている。東條首相の奥さんのかつ子夫人を訪ね、話を聞いている時、彼女への恩給は、400 万円だというのを聞いた。当時のサラリーマンの平均年収は 140 万円くらいの時代であった。軍人の階級によって恩給額が定められている。ドイツでは、将官だろうが一兵卒だろうが恩給は一律だそうである。恩給制度だけでなく、色々なシステムで旧軍部の形を温存している。保阪氏は、本当の姿を見るためには、「きちんと問われるところは問い、反省すべきところは反省する。これは思想とか政治の問題ではありません。常識の問題です。政治や思想にすぐ絡めて論じる人がいるけれども、そうではなく、私たちの日常でごく当たり前の考えです。こういうところに立脚しないといけない」と語る。庶民の当たり前だと思う常識的な「声」をあげることが平和を作り出すと言う。小さくても、私たちの声をあげることが有効なのだと励まされた。最後に「日本が被爆国だからこそ作れる平和論があるはずで、それを作りうるかどうかかが試されていると思います。… 私たちの国の歴史をもう 1 回、つぶさに検討することによって見えてくるものがある。それをつむいで何か形を作っていく」ことが大事だと、講演を終えている。